

電脳千句第六 賦御何百韻

二〇一五年七月二四日から二〇一六年九月一六日

於 さいばあすぺいす

初折表

空蟬の見果てぬ夢や明けの空

羽衣

けふ咲き初めし垣のうの花

千草

水ぎはに誘はれのんど潤して

遊香

風の降り来る石山のかげ

梢風

白き径照らして早も月上る

夢様

やがてむら雲遠く稲妻

樂歳

烏瓜賤が家に灯をともすごと

路花

もの炊ぐ香の厨口より

如月

一ウ

まなかひに和ぎてしづもる鳩の湖

蘭舎

忘れ形見を山へあづけて

衣

ひとかひの後ついてゆく市女笠

草

わざうたとほく雪まぜに聞き

香

銀しろがねのちろりに酒を調へて

風

襲かさねの色のすみれ匂やか

様

春の野に立つ吾妹子のなまめける

歳

時へだつればうつろへる花

花

釣釜おとに松の韻おときく夕まぐれ

月

風吹きあへぬ寂しさの果て

舎

手習すいひの筆の遊すいびのうたなれば

衣

壽いのちながくと選いぶ言の葉

草

まろらかな月に誘はれたもとほる

香

すなどる村は秋の眠りに

風

病む雁の落ちゆく涯を思ひみる

梯

何を求めて出でしふるさと

歳

夢なれや吾を愛子と呼びし声

花

蓬が鳥に亀想ふとか

月

はるかなる雲にたゆたふ宝船

舎

小松引きたる宴をつかし

衣

衣手に触るれば消ゆる春の雪

草

野にも人にもあへしらふ朝

香

萱葍くもゆひの力のまざまざと

風

稻穂の波の黄金かがやく

梯

ざざめきて鄙も都も秋の月

歳

けふの円居まじるの幸さいくあれかしと

花

笠のままよどみなく詠む連ね歌

月

風に染まなむ恋ざめの酒

舎

二ウ

とてもたつうき名をあだにかへもせて

衣

久しかりつるささがにのトうら

草

さざれみづいつか早瀬にあふものを

香

ひとくひとくと鳴くものを見に

風

白梅の香のみ残せる空屋敷

梯

西へ送らん花のたよりを

歳

夕星ゆふじつの野火の烟のあはいより

花

連なる嶺のむらさきに溶け

月

老いぬれば道をいづくとわかねども

舎

笈に秘めたるみほとけの笑み

衣

白雲のいくつ鏡のうみに浮き

草

あこやの珠の聞きし波音

香

寝ねおつるしじまを抜けてゆきし月

風

棉吹く畑のしるきあけがた

梯

三才

ふり返ることのみ多き秋の道

歳

あはれ優しき文でありしに

花

魂のあくがれあり歩く地の極はたて

月

蜘蛛の巣こぼれのこりたる館たち

舎

柁落ちまばゆき光り差し込みぬ

衣

鳥船絵巻ひもとかれゆき

草

空言むなごとをふはり飛ばせしあまり風

香

きこしめしては泳ぎ出す君

風

身をまかせ流るゝままに雲に向ふ

梯

はやも日は暮れ鐘もかすみて

歳

わび住まい貌よ鳥など啼くを待ち

花

八重山吹にしのぶ歌びと

月

蛙にもたはぶれせむとや養かさむ

舎

翌なき春をてらす月の出

衣

三ウ

饑にますらをぶりの涙ぐみ

草

音に聞きしは大地の破れ

香

よにふれば心のひだも衣がへ

歳

力草こそ今は頼りと

梯

わざをぎのわざもむなしきことと知り

風

戯れ遊び野に寝ねしとは

花

真清水のいのちあらたに流れ出て

月

富士の根語るこゑも懐かし

舎

神の如いでまし鬼の如かくれ

衣

冬めく空をまらうとの月

草

木枯しにものや思ふと同はれしか

香

すぎゆくものはかくも美し

風

この花に古人の声をきく

梯

その折々の春やさまざま

歳

四才

そねみとふ悲しきこころ雪解川

花

陽炎揺れて消ゆる幻

月

このあたり破れたる笠の捨て処

舎

手づから植うる一本の苗

衣

目つむればいつしか母に抱かるる

草

ふと先の世の緑り言をきき

香

ほとびたる乾飯のみの朝餉にて

風

夏行の僧のよろよると立つ

梯

人はみな己のうちに木下闇

歳

夕立つ雲のすこし遠のき

花

国引の丘より望む海風ぎて

月

月に浮かぶは浦のとも舟

舎

焦がれしをいなおほせ鳥つかはされ

衣

忘れ扇を美濃の国まで

草

四ウ

墨にはふふところ紙や秋の風

香

くさの名に似る女童の名も

風

うす紅の細長に濃き袴うらき着て

様

帆上げ出づればかすむ鳥影

歳

のどらかに途切れとぎれの水主かこの唄

花

引きゆく鶴の饑とせむ

月

花あかり奥へ奥へとしたふ道

舎

筑波はるかに仰ぎ見る春

衣